

2019年2月3日

福音書からのメッセージ

そして、言われた。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。（ルカによる福音書4章24節）

イエス様はイザヤ書の言葉を朗読した後、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言されました。この言葉を聞いて、人々はイエス様をほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いたとあります。しかし人々の中には、同時にこのような思いを持つ人たちもいたそうです。「この人はヨセフの子ではないか」と。

この言葉には、二つの意味が込められていたと思います。一つは自分たちと今まで一緒に過ごしてきた大工のせがれが、何を偉そうに言っているんだという思いです。律法学者やユダヤ教の教師から教わっていたわけでもなく、大工仕事の手伝いをしていた「あのイエス」が、どうしてみんなの前でしゃべってるんだと思っていたことでしょうか。もう一つは、このイエスという男はずっと自分たちと一緒にいたのだから、もし主の恵みを与えに来たのであれば、まずナザレにいる自分たちに、優先的に与えてほしいというものです。家族的なつながり、親戚関係、幼馴染、昔のよしみ、いろんな人間関係が、ナザレにはあったと思います。その中に、恵みの露を与えてほしい。それが「ヨセフの子」であるイエス様に対する願いでした。

しかしイエス様は、旧約聖書に出てくる二人の人物を引き合いに出して、それを否定します。この二人には共通点がありました。それはイスラエルの民ではない、いわゆる異邦人だったということです。さらに一人はやもめで、一人は重い皮膚病を患っていた。二人とも、社会的に弱い、もっといって社会から排除された人たちでした。



イザヤ書の言葉もそうでした。貧しい人、捕らわれている人、目の見えない人、圧迫されている人に、主の恵みがくるのです。社会の片隅に追いやられた人に、救いは来ない

と思われていた人に、選ばれた民でも何でもない人に、神さまはまずみ手を伸ばされるのです。

教会はどうでしょうか。長い間、救いは教会にしかないと考えられてきました。教会は神さまがおられる聖なる場所、世界は悪の支配する所。だから救われるために教会に来なさいと教えられていたわけです。

しかし、そうではないのです。神さまの目は、最も弱く、小さくされている人のところに向けられています。限られた囲いの中にだけに、恵みの雨が降っているのではないのです。すべての人のところに、神さまは雨を降らせているのです。

神さまは世界に対して働かれています。イエス様の十字架と復活は、すべての人のためになされた愛の業です。わたしたちはそれを知って、「そんなのおかしい、救いはわたしたちにだけ与えられるべきだ」と叫びますか。それとも、わたしたちも教会の外に出て、イエス様の働きに参加しますか。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>